

三英傑の足あとをたどって

Vol.5 家康三大危機の一つ「伊賀越え」と大浜

伊賀越えルート
市観光協会 95-9894



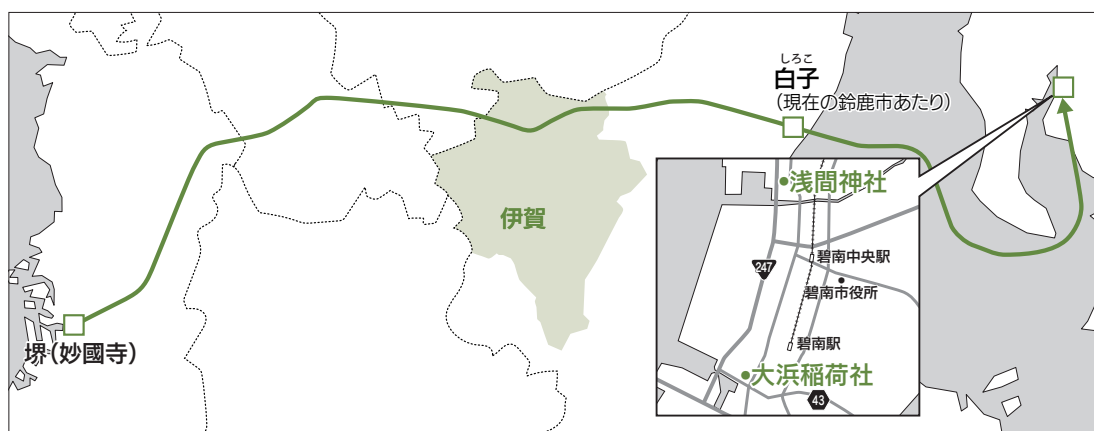
海を越え大浜へ

一五八二年六月二日織田信長が明智光秀に討たれる本能寺の変が起こりました。その時家康一行は、信長の招待で大阪堺で観光を楽しんでおり、軽装で少人数でした。明智光秀から次に命を狙われるであろう家康は、急いで岡崎へ戻ろうとします。陸路で戻る場合、関所を通過しなければなりません。家康は光秀が関所で待ち構えていることを踏まえ、岡崎まで最短距離である、伊賀を越え海を渡るルートで岡崎を目指します。

一時は切腹を考えたほど苦難な道のりであったが、六月四日家康一行は無事大浜へ到着し、岡崎へと向かいました。

麦えまし

伊賀越えで空腹で疲れ切ったなか大浜へ到着した家康一行へ、現在の碧南市浅間町付近の住民たちが、自分たちも食べるものがない中「麦えまし」を差し出しました。感謝した家康は、お礼に米俵を贈ったと伝わり、毎年浅間社で「朝えまし」として地域住民が継承しています。



伊賀越えルート

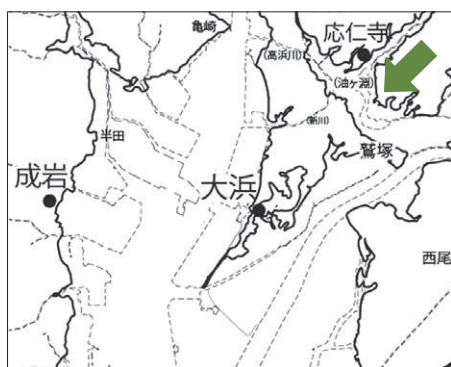
碧南の歴史へのいざない

文化財課内市史資料調査室 41-4566

No.104 水辺の記憶(3)

中世の旅の記録から

伊勢湾、三河湾周辺は古代から海上輸送が発達していましたが、戦国時代には、旅人が戦乱の陸路を避けて海路を進んだ記録を残しています。大浜は知多半島の成岩と船で結ばれていました。称名寺に立ち寄り泊したりしています。



△中世の衣ヶ浦、油ヶ淵(入海)推測図
矢印付近が「あふらさき」(油崎)

天文一三年(一五四四)に称名寺に泊まった連歌師宗牧は、織田勢の侵攻に備えて坊舎の畳を外したままの状況を嘆きつつも、文化人の住職と語り、住職の案内で鷺塚を見物し、岡崎に向かいました。鷺塚はよい眺めの磯である上に、浄土真宗の寺を中心に繁栄していたと記しています(『東国紀行』)。

弘治三年(一五五七)、山科言継は駿河(静岡県)からの帰途、岡崎から川船で矢作川を下り、八ッ面を回って平坂を含む吉良莊を傍らに進み、入海に出て鷺塚に着きました。当時の矢作川は洪水のたびに流路が変わり、矢作古川以外にも幾筋もの流れがありました。この時、今川氏の勢力圏内では安全な旅ができましたが、大浜からの海上で海賊が出るという情報を得たため、成岩の支配者に迎えを依頼して、翌日に海を渡りました。彼は護衛や案内人の費用を記録しています(『言継卿記』)。

天文二二年(一五五三年)、備前国(岡山県)の大村家盛は日蓮宗の聖地巡礼の帰途、岡崎まで来たところ、国境で戦が始まったために急遽進路を変えて「あふらさき」へ行き、そこで小舟に乗って大浜に行き、船を乗り換えて成岩に着きました(『参詣道中日記』)。

「あふらさき」は、油ヶ淵が入海から湖沼に変わった江戸時代前期の絵図では東端村(安城市)の先にあります。入海の中央辺りに延びた砂嘴に燈が灯ったら、漁師も旅人も大いに助かったことでしょう。入海から大浜に小舟がさかんに行き来した証とも考えられるのではないのでしょうか。